医学部に世界中から

ハンガリーで医師になる

ハンガリーの三つの国立大医学部は、世界約二十カ国から学生を受け入れている。授業はすべて英語。三年前から日本人にも門戸が開かれ、現在、約八十人が学ぶ。特徴は日本の国立大と比べてもそれほど高くない学費と「医師になりたい」という熱意重視の入学者選抜。閉塞(へいそく)感漂う日本の医療界を尻目に、一度は医の道をあきらめかけた若者たちが海を渡り、世界各国の学生と切磋琢磨(せっさたくま)している。

(ブダペスト共同 ＝名古谷隆彦)

頑張る日本人学生

薬剤師から転身目指す

医療現場で疑問感じて

セゲド大・佐藤さん

薬剤師をしながら、趣味を楽しむ生き方をしようと思っていた。だが医療現場を間近で見るうちにさまざまな疑問を感じ「どうしても医師の道に」と思うようになった。

ハンガリー南部にあるセゲド大学の医学部二年生の佐藤英之さん(31)＝埼玉県出身＝は、四年間の薬剤師経験を経て、医学生になった。

社会人として初の勤務は鹿児島県の田舎町。小児科クリニックの脇にある調剤薬局で、患者の多くは赤ちゃんだった。

「夕方からずっと熱が高い。このまま朝まで様子を見ても大丈夫か」。心配する母親から、夜中に相談の電話がたびたびかかってきた。自分の一存では判断できないもどかしさ。時間外で気が引けたが、医師に連絡を取らざるを得なかった。

宮城県の病院でも働いた。多くの尊敬できる医師がいたが、患者の話をきちんと聞けないような人にも出会った。もともと医師になる気はなかったのに、四年間の体験が自分を変え た。

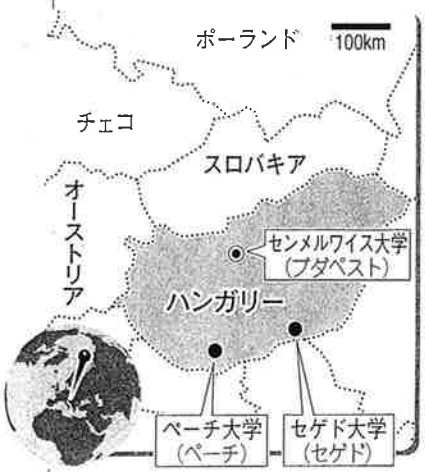
しかし、日本の医学部は仕事をしながら受験するには狭き門だった。受かる保証もなく受験勉強を続けるより、海外の医学部を目指す方が現実的だと考えた。セゲド大では一年間予備コースで英語と理系科目を学び、医学部に進んだ。

セゲド大で授業を受ける佐藤英之さん

周囲は年下の学生ばかり。でも自分のような回り道をした人間の方が、よりよい医師になれるという自負がある。

各国の学生が集う英語コース約百五十人の中で、成績はトップクラス。薬剤師で得た知識と経験が生きているという。

やって来るまではまったく知らない国だったハンガリー。時間はゆったりと流れるが、夜中の一時ごろまで勉強し、朝七時に起きる生活が続く。日本で見てきたのは医師不足の町。将来はプライマリーケア(初期診療)に取り組むのが夢だ。



英語で授業 日本より難しい卒業

セゲド大医学部で授業を受ける各国からの学生たち＝ハンガリー

日本人医学生の海外留学はハンガリーだけでなく、チェコやポーランドなど東欧諸国を中心に近年広がりをみせている。医学の世界でも汎用性の高い英語で授業を行う大学が多いためだ。

ハンガリーでは約二十年前からセンメルワイス大と、南部にあるセゲド大、ペーチ大の国立三大学が英語コースを設置。医学部は六年制で、事前に一年間の予備コースで英語のほか、生物など理系科目を学んでから進むこともできる。

学費は年間百数十万円で日本の国立大医学部より多少割高だが、生活費は格安。入学に際し、医師という職業への熱意が重視される。日本ほど入試難易度は高くないが、入学後の進級は簡単ではない。

ハンガリーでは自国民は授業料が無料で、各大学とも留学生を対象とする英語やドイツ語のコースで得た授業料を大学病院の設備投資などに回している。

ハンガリーで取得した医師免許は欧州連合（EU）二十七カ国で通用するが、日本で医師として働くには日本の医師国家試験に合格することが必要。その場合、厚生労働省が「大学の成績が良好であるかどうか」を個別に審査し、受験資格を判断する。

早ければ二〇一二年にも日本人の卒業生が出る予定だが、入学の受け付けや医学生を支援している民間事業者「ハンガリー医科大学事務局」（東京都新宿区）は「ハンガリーの医学部を卒業するのは日本よりも難しい。中途半端な心構えではいけない」と話している。

センメルワイス大・沼田さん

一度はあきらめた夢へ

最期の祖母の涙で決心

目の前で祖母の命が燃え尽きようとしていた。心拍数を示すモニターの数値が徐々に下がっていく。「もう逝くんだな」。最後に大きく息を吐き出した祖母は、そのまま安らかに眠った。九十二歳だった。最期の瞬間を目に焼き付けた。

ブダペストにあるセンメルワイス大学医学部二年の沼田るり子さん（二〇＝茨城県出身＝は、農業を営む母方の祖父母と同居しながら育った。母は実家に縛り付けられる生活が嫌で、祖母とはいつしか疎遠になっていた。

死の前日、祖母の枕元で母が予想もしなかった言葉を口にした。「お母さん、愛しているよ」。二人は気持ちが通じ合っていないとばかり思っていた。祖母の目から涙がこぼれ落ちるのを見て、人間という存在がたまらなくいとおしく思えた。

当時、筑波大の四年生。対人関係がうまくいかず、家に引きこもっていた時期だった。そんな自分に祖母は最後まで生き抜く姿を見せてくれた。

「るりちゃんが大学に行くためだから」。市場に作物を売りに行き、こつこつお金をためてくれた祖母。医師になることをずっと楽しみにしてくれていた。大学進学時に一度はあきらめた道に、再び挑戦してみようと心に決めた。

偶然目にした新聞記事で、ハンガリーの医学部が日本人の学生を募集していることを知った。学費も日本の国立大程度なのが魅力だった。米国がリードする現代医学の世界。英語で学ぶことの利点は大きいと思った。

世界各国から学生が集う英語コースは、ストレートで卒業できるのが半数程度。ここには何となく医学部に来てしまったという人はいない。

大学の授業が終わると、日本人の学生が集まるブダペストのスタディールーム（自習室）で後輩たちの指導もこなす。引っ込み思案だった自分は、もうどこかへ行ってしまった。

日本人の学生が集まるセンメルワイス大学の自習室で後輩を指導する沼田るり子さん